

ポール・セザンヌ 《大きな花束》



ポール・セザンヌ (1839-1906)
《大きな花束》

1892-95年頃
油彩・キャンバス
81.0×100.0cm
平成26年度購入

こ

のたびコレクションにセザンヌの大作が加まりました。主に二〇世紀以降の日本の美術を扱うMOMATにどうしてセザンヌなの?と思われる方もいらつしやるかも知れません。理由は、①セザンヌは一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて活動した画家(生没年がちょうど両方にまたがっていますよね)。一九世紀フランス美術の流れに属するだけでなく、二〇世紀美術の出発点を作ったという点でもっとも重要な画家のひとりだから。②特に日本においては、明治の末から今日に至るまで、あまりに多くのアーティストに影響を与え続けているから。したがってMOMATとしては、この作品を、明治・大正・昭和の美術家たちへの影響を明らかにするのみならず、現在のアーティストたちとのコラボレーションも視野に入れ、展示・活用していくつもりです。

この作品はかつて、セザンヌの大コレクションだったオーギュスト・ペルラン(一八五三―一九二九)という富豪の持ち物でした。その邸宅は当時一種の私設セザンヌ美術館になっていた、画家の安井曾太郎、小説家の島崎藤村ら、日本人が訪れた記録もあります。作品の木枠には、「配膳室のドアの右側」と、邸内に飾る位置を示すフランス語の書き込みが残っています。

《大きな花束》には謎めいたところがいくつかあります。そのひとつが、セザンヌ

の静物画としては最大クラスのサイズ。実はこの作品、松の木を描いた二点の大作《大きな松の木と赤い大地(ベルヴェユ)》(一八八五年頃、八一・〇×一〇〇・〇cm、個人蔵)および《大きな松の木と赤い大地》(一八九〇―九五年、七二・〇×九一・〇cm、エルミタージュ美術館蔵)に、構図やサイズがとてもよく似ているのです。ということは、セザンヌは、室内で描く静物画を、あたかも広々とした風景を描くような意識で扱ったこととなります。そう思うと、背後の青い壁がまるで空か湖に、花瓶の花が枝を広げる樹木のように見えますね。

また、もうひとつの謎は、画面周辺に見られる「塗り残し」です。セザンヌにおける「塗り残し」は、単なる未完成ではなく、かつてこのテーマで展覧会がひとつ作られたぐらい重要な手法なのですが、ではこの作品における「塗り残し」は一体どんな意味を持つのでしょうか。私の仮説はこうです。花瓶から花が広がるその根元、画面のちょうど中心の部分は、非常に細かく描きこまれています。セザンヌは、この中心点に視線を集中させ、そのことによって周辺がぼやけて見える、この視覚現象自体を描き表そうとしたのではないのでしょうか。

いかがでしょう。こんな解釈ではもの足りない!というみなさん。どうぞギョラリーでじっくりと謎に挑んでみてください。 (美術課長 蔵屋美香)